ブラーフマナ研究 —ヴェーダ散文の翻訳と注解—（平成11−12年度）
ヴェーダ散文文献の翻訳と注解（平成13−14年度）

後藤　敏文

【要旨】

ヴェーダは紀元前二千年期の後半から順次製作・編集された，古インドアーリヤ語の古層（ヴェーダ語）で書かれた宗教文献群の総称である。その中，散文で書かれ，祭式を巡る議論を中心内容とする部分は「ブラーフマナ」と呼ばれ，その最古層は紀元前800年頃にまで遡ると推定される。最古層の「ブラーフマナ」は，「黒ヤジュルヴェーダ」と総称される文献群の「サンヒター」（一般に「本集」と訳される）と呼ばれるテキストの中に編集されている。その後200から300年の間に，各学派のブラーフマナが「ブラーフマナ」というテキスト名を冠して独立した文献として編集された。比較的よく知られている「ウパニシャッド」はこれらブラーフマナに見られる思弁を引き継いで成立した文献群である。

ブラーフマナ文献に関しては，今日の学的水準でなされた翻訳・紹介は存在しない。印欧語比較言語学，インド文献学，特にその言語と祭式の研究は今日までに飛躍的発展を遂げており，漸く信頼できる翻訳と深い理解が可能となりつつあるが，達成された成果は個別分野ごとの先端的な研究に止まっており，それらを総合的に動員して検証可能な学術的な形にまとめたものはない。本研究は，膨大な文献群から特に重要で目的に適った部分を選んで多角的な注記とともに日本語で提供することを目標に置いた。

当初は，計20篇程の纏まりのある部分を選び，原典の読みを確定し，翻訳を提供することを計画した。当時の専門家間の祭式解釈という特殊な枠組みの中で語られる文献であり，文体も極度に簡潔であるため解釈の果たす役割が大きく，詳細な説明・注記が必要となる。注記の内容は，祭式の解説，研究史，他の関連個所への言及の他，原典批判，語形，アクセント，語彙，シンタクス，人物・事物に関する解説などである。ヴェーダ散文の文法書，読本に類するものは今日まで国内外を通じて存在しないので，語彙集と簡便な文法とを付して，ヴェーダ散文研究への高度な入門書の機能をも併せ持つ形に仕上げて出版することを念頭に，研究計画を建てた。

実際の研究の過程で，注記・解釈・解説を当初の計画より大幅に増やす必要性と，相互に関連する原典箇所を同時に扱う必要性とが解り，取り扱う篇数を絞り込んだ。具体的成果については【研究成果】の項に述べる。

【位置付け】

本研究が対象とする「ブラーフマナ」の言語は，インドヨーロッパ語の純度の高い散文の最古の姿を代表する。ほぼ同時代の遺産であるギリシャのホメーロスの叙事詩が韻文であることから考えてもその重要性が理解される。近い関係にあるイラン語（ゾロアスター教典『アヴェスタ』の言語；アケメネス朝諸王の碑文に見られる古ペルシャ語）をはじめ，ギリシャ，ローマ，アナトリア（ヒッタイトなど），ヨーロッパの主な諸言語，さらに中央アジアの印欧語（トカラ語；中期イラン諸語）の言語文化を理解する上でも，ブラーフマナ文献には第一級の資料的価値がある。インド語内部においては，後の叙事詩のサンスクリットや古典サンスクリットは勿論，仏典のパーリ語を始めとする中期インド語への展開過程を理解する上で，基本的な

出発点となる。

内容は，儀礼に用いられる讃歌・祭詞と祭式行作の意義付けを巡る思弁とを中心としているが，背景には，世界の創生・構成，生命の発生と循環，日・月・季節・年ごとの行事の根拠付け，社会構成の原理，生物の分類，言語の分析などに亙る，当時の「世界理解の学」が総動員されている。「ウパニシャッド」は「ブラーフマナ」から直接発展した文献である。一般に比較的よく知られているウパニシャッドも，ブラーフマナ文献の祭式をめぐる議論の解明の上に立って，改めて理解し直す必要がある。後のインド思想の展開にとって，いわば公理となった「輪廻」と「業」の観念が確立したのは「ブラーフマナ」の後期から「ウパニシャッド」の最古層へかけての時代である。最近の研究では，これらの基本概念は，祭式をめぐる議論から直接派生した発展形であると理解されるようになってきた。「輪廻」と「業」の理解と解決を巡って繰り展げられるその後の営為，即ち，仏教，ジャイナ教，所謂ヒンドゥー正統哲学学派の思想を理解する上で，本研究が扱う文献は出発点となるものである。

さらに，「ブラーフマナ」の正しい理解からは，人類の古今の宗教研究一般や，今日盛んなフィールド研究に基づく文化の諸相の研究にとっても，文献に裏付けられた基本的な情報・比較材料の提供が期待される。既に述べた如く，インドヨーロッパ語族の文化遺産の要素を確認する為には基礎資料である。他方，西南アジアや東アフリカはじめ，他の遊牧社会などの文化に見られる諸要素と比較対照することができれば，共通する普遍的要素と，インドないしはその背景にある文化に特有な要素とを，個々に確認する作業に欠かせない視点が得られるであろう。

【他領域との連携による成果】

本研究は多面的な視点を重んじ，隣接他分野から学ぶべき事柄が多い。しかし，実際の作業の上では現実的な制約があり，情報を得るにも限界がある。今回のプロジェクトに公募で参加し得たことはこの意味で重要な意義があった。具体的事例を挙げるゆとりはないが，研究班における交流を通じて学ぶ点が多かった。例えば，後代のインドの学派的思弁を専門領域とする同僚からは，一方では，ヴェーダから古典期の文献に至るインド思想史を貫く公理のようなものの連続性およびその変容と，他方では，新たに加わった，または，消えていった要素とを確認する上で，具体的な情報とヒントが得られた。聖書研究の文献学からは方法論的なヒントと，ヴェーダ世界の普遍的な要素と特殊な要素を洗い出すための手がかりとが得られた。また，特に，研究に必要な「世界史」理解へ向けて，座標軸を得る為に具体的に学ぶところがあった。東アジアの古典学研究からは，背景にある世界観，文献ないし古典の構成基準に，我々が扱う領域とは大きな相違があることに改めて気づかされた。今後，文明そのものを全体として理解する場合，特にインドから出発した仏教の展開について考える場合などに有効な視点が得られた。西洋古典の研究者とは班研究の中で交流することができず残念であったが，シンポジウムの機会に有益な知見を得ることができた。海外からの研究者の招聘が特に有意義な機会を提供してくれた。

しかし，古典学の諸領域にとって「他領域との連携」の本質的意義は，個々の成「果」の中にあるのではなく，より深い「根」の部分に関わる。他領域から得られるものは個別情報でさえも，自分の専門の中に置いて考え直す時，研究の幹の部分に修正変革を迫るものとなる。このことを，この4年間の経験で特に実感した。他領域との連携が本当の意味で実を結ぶのは，従って，今後の我々の研究・教育の中に於いてであり，早急な結論を求めることには危惧の念をもつ。私個人としては，将来この4年間の研究計画を思い起こし，自分の研究に新たな基盤を作ってくれたことを再確認する時が必ず来ると考えている。このような連携は絶えず発展させ，多くの同僚と分かち合ってゆくべきものである。また，複数の古典学・文献学が同一平面で議論するだけでは実りが少ない。古典学・文献学の次元を越えた，他分野の専門家が介在し，別次元の営みからの検証の視点が加わることによってはじめて，文献学者の間においてさえ真の交流が可能となる。我が国の古典文献研究には，うまく活かされれば有利に働く条件が潜在的に備わっている。今後，その力を活用すべく条件が整えば，人間全体の問題について有意義な貢献がなされ，社会への還元も果たされてゆくものと確信する。

【研究成果】

これまでに準備できた原稿は以下の諸項についてである：

1．シュナハシェーパの物語
　アイタレーヤ・ブラーフマナ VII 13–18，シャーンカーヤナ・シュラウタスートラ XV 17–27

王の即位式で読み上げられる「物語」である。子のいない王が聖仙の助言により，生まれた子を犠牲にして捧げるとの約束で，ヴァルゥナ神（元々王権の神格化に遡る制度を司る神）に頼み，息子ローヒタを得る。王は口実を設け，犠牲を延期してもらうが，やがて逃れられなくなる。息子は森に逃れ，王はヴァルゥナの齎した罰により水腫病となる。ローヒタは，インドラ神（漢訳仏典の帝釈天のもと）の助言により遍歴を続ける。6（乃至7）年後，森で3人の息子を連れた，飢えた婆羅門に出会い，その次男シュナハシェーパを牛100頭で買い，彼を自分の身代わりにする。シュナハシェーパの実の父は，更に牛100頭で，供物となる息子の解体役を引き受ける。シュナハシェーパは讃歌（リグヴェーダに彼の作として収録されている100詩節）を唱えて神々にすがり，解放され，王の病も癒える。犠牲祭でホートリ祭官を務めたヴィシュヴァーミトラがシュナハシェーパを養子として得るが，実の父は返還を要求し，詩による呼び掛けによって争う。結局，シュナハシェーパは，王族と聖仙の両正統を受け継ぐヴィシュヴァーミトラの家系を継ぎ，彼の100人あった息子の中，自分より年少の50人の上に立つ。年長の50人は辺境に植民する。

息子によって死後自分の世界が継続するという考えと，個人という観念の追求という，新旧の世界観の対立・抗争が背景にある。後者の，息子の存在を介さずに死後も存続する個人の主体という観念は苦行者の発生と関わり，この物語は，苦行の実態に言及される最も古い個所の一つとしても重要である。インドラを主神の位置に置く，移動期の生活を理念の中心に据える世界観と，ヴァルゥナ神に代表される，恒久的な社会制度を重んずる世界観との対比が，これに重ねられている。犠牲祭の基本構造，家族制度のあり方，争いや調停のルールなどについても注目すべき資料を提供する。

2．プルーラヴァスとウルヴァシー

マイトラーヤニー サンヒターI 6, 12，カタ・サンヒターVIII 10，カピシュタラカタ・サンヒターVIII 6，シャタパタ・ブラーフマナXI 5, 1，バウダーヤナ・シュラウタスートラXVIII 44–45，ヴァードゥーラ・アヌアーキャーナI 1–2；参考：リグヴェーダX 95

各ヴァージョンに共通する主題は，地上の王プルーラヴァスと，天界に属する水の精ウルヴァシーの結婚と，その後の別れの物語である。両者の間に生まれた子アーユが後の人間界の祖であり，死後の生命を支え，地上に子孫が継続して行く為に必要な祭式の起源と，それに不可欠な祭火の地上へ招来を説明する。

古くから知られていたヴァージョン（リグヴェーダ，シャタパタ・ブラーフマナ）は，特に比較神話学の興隆期に，ギリシャ・ローマの「アモールとピュシケーの物語」との比較で注目された。特に注目されたのは，「裸体を見せないこと」という，両者に共通する結婚の条件であった。本研究では，代表的なものの紹介ではなく，全ての伝承を対照の上検討・呈示する方法を採り，有意義な成果が得られたと思う。アーリヤ的な父権制度の，インドの地で出会った母権社会との宥和のモティーフが発見できたのもその成果である。文法的にも，動詞の過去時制の使用法について，有意義な視点が得られた。重要な伝承を含むヴァードゥーラ派の写本が京都大学人文科学研究所の井狩教授によって発見され，目下出版の準備がなされているが，同氏の好意によりその原稿の提供を受け当該部分が検討できたことは，特に有意義な成果を齎した。この部分については，その緊急性と重要性とを考えて論文を発表した（→【発表成果一覧】5，7）。

3．マールターンダの物語—人と死の起源—

マイトラーヤニー サンヒターI 6, 12，カタ・サンヒターXI 6，タイッティリーヤ・サンヒターVI 5, 6，シャタパタ・ブラーフマナIII 1, 3（及び対応するカーヌヴァ派伝承），ヴァードゥーラ・アヌアーキャーナI 3–4；参考：リグヴェーダX 72

社会制度の神格化を中心とする一連の神々（アーディティヤ神たち）はインドイラン共通時代に成立したと考えられる。マールターンダ（「死んだ卵から生まれた者」）から人間が誕生したというこの神話は，このアーディティヤ神たちを巡る神話圏に属し，イラン側にも跡付けられる。この神話は同時に死の起源の神話ともなっている。その全体像を理解することは，リグヴェーダの一創造讃歌をブラーフマナの諸神話と照らし合わせることによって可能になる。背景には，ギリシャをはじめ世界各地に見出られるであろう，球体で，神々を超える能力を備えた原初の人間を巡る神話の存在が推定される。これについては，最近論文を書いたので，極く一部を抜粋して本報告の末尾に参考として付す。（→付録）

ブラーフマナに見られる神話のあらすじは以下の通りである。女神アディティ（「無拘束，自由」）が順番に7人のアーディティヤ神たちを生む。彼らは8番目

に宿ったマールターンダを危険視し，流産させる。流産された胎児から死んだ部分を切り取って作り変え，人間の形にした。それが人間の起源である。神話の枠組みは祭式に用いられる粥料理の因縁譚に採られている。ヴェーダ文献は，普通，父親を中心として子孫の誕生を語るので，夫の存在なしに誕生を語ることが要請されるこの神話は貴重な例外であり，興味深い現象が見出される。

4．マヌとマヌの娘イダー，マヌの妻を巡る神話群

4．1．マヌと洪水

シャタパタ・ブラーフマナ I 8,1（及び対応するカーヌヴァ派伝承），カタ・サンヒターとジャイミニーヤ・ブラーフマナに見られる若干の言及

「ノアの箱舟」に類似した，比較的よく知られた神話で，3．のマールターンダからの人類の誕生とは別系統の始祖神話である。後代のインド文献にも複数の伝承が記録されている。始祖のマヌ自体は，タキトゥスが伝えるゲルマン民族の始祖名に対応形が見出されるので，マールターンダより古い時代に確立していたものと推測される。インドには，この他，ヤマ（漢訳仏典の閻魔）を始祖とする神話群があり，リグヴェーダで既に死者の楽園の王として複数の讃歌を持っている。

4．2．マヌとその娘イダー

マイトラーヤニー サンヒター I 6,13，カタ・サンヒター VIII 4（及び対応するカピシュタラカタ派伝承），タイッティリーヤ・ブラーフマナ I 1,4

祭式に必要な3祭火の設置順序を根拠付けるために引かれる神話である。マヌが献供したバターオイルから娘イダー（「栄養素」）が生まれる。彼女はアスラ（漢訳仏典の阿修羅）たちの祭式に派遣され，アスラたちのライヴァルである神々から，正しい祭火設置の順序を教えてもらう。

4．3．マヌの妻とアスラたちの祭官

マイトラーヤニー サンヒター IV 8,1，カタ・サンヒター XXX 1（及び対応するカピシュタラカタ派伝承），シャタパタ・ブラーフマナ I 1,4（及び対応するカーヌヴァ派の伝承）

マヌは祭式用具を持っていて，それが立てる音を聞くと，聞いた数だけのアスラが滅びてしまう。そこで，アスラの祭官たちが，マヌがもつ祭式と祭官への「信頼」を盾にとって祭式用具を奪い処分する。しかし，それらの中にあった「復讐の力」ないし「ことば」が逃れ出て，順次別のものを経て，遂にマヌの妻の下腹部に入り込む。アスラの祭官はマヌに，その妻を犠牲にして祭式をするように強いるが，インドラがこれを見破って先回りし，アスラの祭官たちは植物に変えられてしまう。

5．ブリグの異界巡り

シャタパタ・ブラーフマナ XI 6,1，ジャイミニーヤ・ブラーフマナ I 44

ヴァルゥナが，学識に奢る息子ブリグに別の世界を歴訪させる。それらは，木々，家畜たち，植物たち，水たちが，この世で受けた苦しみを復讐している諸「地獄」と，祭式が機能するために不可欠な「信ずること」とその反対の「信じないこと」，「怒り」が人の姿をとっている世界とであった。それらはヴェーダ期の，諸儀礼から構成された「シュラウタ祭式」の齎す必然的限界を示すものである。これを克服する為に，ヴァルゥナはアグニホートラ祭（毎晩・毎朝のミルクの献供）が不可避であることを教える。翻訳としては，既に伏見誠氏の発表したものがあるが，本研究の中で再検討し，全体の枠組みに収まるよう再整理した。

6．牝犬サラマーと，パニ族たちの牛を掠奪する物語

ジャイミニーヤ・ブラーフマナ II 440–442，参考：リグヴェーダ X 108，その他の「ヴァラ」神話に言及する箇所，特に I 61，VI 17，VIII 14，X 67–68）

リグ・ヴェーダに語られるインドラの武勲の一つ「ヴァラ破り」を物語にしたものである。パニ族が隠した牛の群を「解放」（実質は掠奪）する物語である。リグヴェーダにおいては祭官たちの神ブリハスパティ（言葉の霊力の主）も役割を演じる。牛たちは，神話のレヴェルで，太陽の光と重ねられており，失われた（岩戸に閉じこめられた）太陽光を取り戻す神話ともなっている。

パニという名のアスラ達は神々の牛飼いであったが，神々を裏切って牛たちを連れ去り，ラサー（大地の西の果てにある川）の中に城塞（ヴァラ）を設けて閉じ込めた。神々が最初に牛の捜索を命じた鳥の一種はパ

ニたちに懐柔されてしまい，インドラによって末代まで呪われる事となる。次に捜索を命じられたのは，牝犬サラマーであった。サラマーはラサー川に行く手を阻まれるが，いざ泳ぎ渡ろうとすると，大河の面目が潰れるのを恐れたラサーは自ら浅くなり，サラマーを渡してやる。サラマーは牛たちを見つけ，パニたちの懐柔にも応じず，神々の元へ戻って報告の役目を果たす。神々は褒美としてサラマーの子孫を食べ物に困らない者となした。神々は「渡し舟」という名の祭式を用いてラサー川を渡り，城塞を焼き（祭官の祈りの言葉がもつ熱力），棍棒によって破壊し（インドラの武勇），牛たちを城塞の外へと運び出した。

7．インドラによる三頭の怪物ヴィシュヴァルーパ退治

マイトラーヤニー サンヒターII 3, 9，カタ・サンヒターXII 3–4，XII 10–12，タイッティリーヤ・サンヒターII 5, 1–2，シャタパタ・ブラーフマナI 6, 3（及び対応するカーヌヴァ派の伝承），ジャイミニーヤ・ブラーフマナII 153–157

トゥヴァシュトリには3つの頭を持つ息子ヴィシュヴァルーパがいた。ヴィシュヴァルーパは3つの口の各々でソーマの絞り汁，スラー酒，食物を摂り，3つの口で種々のサーマン（詠唱）を唱え，たった一人ですべての祭式を完了させることができた。彼は神々に敵対するアスラを母としており，恐れを抱いたインドラに殺されてしまう。インドラに息子ヴィシュヴァルーパを殺されたトゥヴァシュトリは，インドラを除け者にしてソーマ祭を挙行した。しかし，インドラはそのソーマを奪って飲んでしまう。トゥヴァシュトリは怒り，インドラが飲み残したソーマから魔物ヴリトラを生み出してインドラを殺そうとする。ところが，ヴリトラを生み出す為の呪文を言い違えた為，ヴリトラは逆にインドラに殺されてしまう。

ソーマを巡るその後日譚を扱う複数の伝承については難解な部分があって，予想以上に手間取り，また，各派の伝承間の関係をどう解釈すべきかについて未解決な部分を残している。

8．頭のない祭式を巡る神話群

8．1．チヤヴァナ仙の若返り

シャタパタ・ブラーフマナIV 1, 5（及び対応するカーヌヴァ派の伝承），ジャイミニーヤ・ブラーフマナIII 120–126

チヤヴァナ仙が，年老いた姿で地上に取り残されていた所へ，シャーリヤータの一族が通りかかる。彼の息子達がこの老人に石を投げつけたために呪いを受け，一族間に不和が生じる。シャーリヤータは仙の怒りを解く為に自分の娘のスカニヤーを差し出す。アシュヴィン双神が通りかかってスカニヤーを誘惑したのを機に，チヤヴァナは一計を案じ，自らの若返りを図る。チヤヴァナは，アシュヴィン双神に，彼らが祭式から除外された不完全な存在であることを教え，これに対する対処法を授け，その見返りに，治療の神アシュヴィン双神に若返らせてもらう。アシュヴィン双神は，チヤヴァナに教えられたとおり神々の下へ行き，自分たちを祭式に招く約束と交換に，彼らが「頭のない祭式」を行っていることを教え，「祭式の頭」を回復してやる。

シャタパタ・ブラーフマナでは，具体的な「祭式の頭」の回復は，成立が別とされる後の巻に於いて説かれているが，この話はそのことを予想した上で語られており，文献の成立事情を探る上で，重要な示唆となる。

8．2．頭のない祭式とその回復方法

シャタパタ・ブラーフマナXIV 1, 1，ジャイミニーヤ・ブラーフマナIII 126–128，マイトラーヤニー サンヒターIV 5, 9，タイッティリーヤ・アーラニャカV 1

祭式そのものと同置される神ヴィシュヌは祭式の究極に達し，神々との約束に反してその果報を独り占めにする。ヴィシュヌが弓の端に頭をもたせかけていた時，神々は蟻たちを唆して弓弦を切らせ，ヴィシュヌの頭を切り飛ばさせる。以来祭式は頭部を失った。ダディヤンチュはその回復方法を知っていたが，それを他の者に語ると，頭を切断するとインドラに脅されている。アシュヴィン双神はダディヤンチュの下に入門し，ダディヤンチュの頭を馬の頭とすげ替えておき，インドラが頭を切った後，もとの頭を付け直すよう図って，その知識を我がものとする。

8．3．ダディヤンチュの物語

ジャイミニーヤ・ブラーフマナIII 64–65

インドラはアスラを破る為にダディヤンチュの助力を必要とし彼を捜す。彼は既に天界に上っており，8. 2. に触れた物語の中で彼が用いた馬の頭部しか残されていない。インドラはそれを探し出し，掲げておく。それを見るとアスラたちは頭部を失って滅びる。

ダディヤンチュはもともと「酸乳の色を帯びた毛色の」の意味で，リグヴェーダでは馬の名として現れ，インドラがその馬の骨によって障碍物を打ち壊した（打ち殺した）と歌われている。背景には馬の骨を武器に用いた史実が考えられるが，「驢馬の顎骨によって，私は千人の男たちを打ち殺した」（旧約聖書『士師記』15，16）が想起される。また，ジャイミニーヤ・ブラーフマナの話からは，馬が死ぬと首を切り取って門口に掲げておく，という我が国の風習（佐々木喜善『郷土研究』5－3，1931，21）が思い合わされる。

9．アーリヤ人の東方への進出

シャタパタ・ブラーフマナ I 4, 1

アーリヤ人の植民活動を伝える言及は複数見出されるが，この話はヴィデーガ族の東方進出を伝える貴重な資料である。「ヴィデーガ」は，ミティラー（現ビハール州。ネパール国境に近い）を都城として仏教興起以前の一中心勢力であった「ヴィデーハ」族の古名と考えられる。シャタパタブラーフマナ，ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッドが成立・編集されたのもこの地（部族）においてであり，ジャナカ王，ヴァージャサネーイン派の開祖である祭官学者ヤージュニャヴァルキャを擁した当時のフロンティアであった。部族は当然のことながら，王と祭官とに率いられ，部族の火を中心に移動する。この話では王マータヴァが口の中に部族の火を隠している。この火が一年中水をたたえるサダーニーラー川（現ガンダック川）を東へと越え渡る以前には，その東部地帯は湿潤であり，アーリヤ人は進出していなかった。祭官が唱える「火を燃え立たせる讃歌」中の「バターオイル」の語に反応した火が，王の口から迸り出て大地を焼き，アーリヤ人が住めるようになる。

この話の中に用いられる特別な語彙から，アーリヤ人の東方進出は，焼き畑と共に進められたことが推測される。更に，王の名「マータヴァ」はギリシャのプロメーテウスの「メーテウス」の部分に対応し，基にある動詞「盗む，掠める」（Narten の語源説による）は，インドでは *prá-*（ギリシャ語の *pro-* に対応）を伴って用いられることが多いので，（祭）火を盗んで人間たちに齎す古い印欧語族共通の神話の存在が示唆される。この見解は【発表成果一覧】の論文５の末尾に発表した。

10．農耕（焼き畑）を巡る言及

マイトラーヤニー サンヒター I 6,3，I 8,2，IV 8,6，カタ・サンヒター VI 5（～カピシュタラカタ・サンヒター IV 4），XXIX 4（～XLV 5），タイッティリーヤ・サンヒター VI 6,7,4，ジャイミニーヤ・ブラーフマナ II 207–209，III 301

9．の話に窺える焼き畑をより詳しく確認すべく，耕作の具体的過程が窺える箇所を選んで翻訳・解説した。

完了した部分の翻訳と注釈とは印刷した場合に換算して約200頁分に当たり，原典の校訂版その他を合わせて，計250頁程に相当する。計画遂行の過程で，当初考えていた以上に文法・語彙・内容に亙る個別の研究と詳細な注記・解釈の呈示が必要であることが解った。この研究計画によって理解が深まったが，その分，出版は少し先になる見込みである。この研究計画の中で得られた成果を個々に発表する余裕はないので，基本的には全てを出版の中に盛り込みたい。

ヴェーダ散文文献を多角的に掘り下げて研究したことから，新たに得られた視点も多い。できれば更に，当時の実生活と思想の展開に関わる題材を取り入れたい。具体的には，

牛の放牧と，これに伴う掠奪
植民活動
エネルギー・生命物質の循環に関する観念
死後の問題についての思弁
輪廻と業

の各項を補いたい。語彙集とヴェーダ散文に関する文法事項その他についての概要を，全ての原典校訂，翻訳，注記が終わった後に作成し，３年程の中に是非とも出版を果たしたい。

なお，印欧語比較言語学の国際学会誌 Kratylos は毎号巻頭に各分野における研究史の総括を特集している。次々号は「ヴェーダ散文研究史」を予定しており，この項の執筆依頼を既に何年か前に受けている。言語を対象とした，19世紀から今日までにこの領域で為された研究全体の紹介と評価とが主になるが，文献の特殊性から，原典出版，翻訳研究，祭式研究の全てに触れる必要があり，今回の研究計画遂行の為に総動員された文献を中心に報告・検証することになる。

付録 「人類と死の起源——リグヴェーダ創造讃歌X72——」から

リグヴェーダには複数の創造説が見られるが，その中のX72について，最近【研究成果】3．に挙げたヴェーダ散文の研究に基づき，解釈を呈示した：【発表成果一覧】8。ここでは，研究部分を省き，全体の訳と，インド以外の世界にも関連する最終詩節の解説部分を，一般向けに改めた形で見本として再録する。

翻訳

1 神々の（諸々の）生れを，今，我々は公言したい，昂揚の中に，
（以下に）言挙げされる（諸々の）讃辞の中に，
ひとがもし，（この）後の代（世）に見ることになるならば（または：誰かが後の世に見ることになるように）。

2 ブラフマン（言葉の霊力）の主がこれらを鍛冶屋のように溶融（鍛造）した。
神々の原初の代（世）に於いて，非存在から存在が生まれた。

3 神々の最初の代（世）に於いて，非存在から存在が生まれた。
それに引き続き，（諸々の）領域が生まれた。その際，足（足の裏）を上向きに広げた者から。

4 地が足（足の裏）を上に広げた者から生まれたのだ。地から（諸々の）領域が生まれた。
アディティ（「無拘束」）からダクシャ（「能力」）が生まれた。ダクシャからは，また，アディティが。

5 アディティは実に生まれたのだ。ダクシャよ，おまえの娘として。
彼女に引き続き，神々が生まれた。幸を齎し，不死を繋累にもつ［神々］が。

6 神々よ，おまえたちが，あの時，（原初の）海の上に，よく捕まり合いながら立っていた時，
その時，おまえたちの激しい埃（飛沫）が，踊る者たちの［それの］ように，飛び散っていた。

7 神々よ，おまえたちが，ヤティたちが［した］ように，諸世界を充満させた時，
その時には，おまえたちは，海の中に隠されてあった太陽を，運び出し了えていた。

8 アディティの，からだから生まれた息子たちは8人［であった］。
彼女は，7人とともに，神々のもとへと去った。
［彼女は］マールターンダを捨てた。

9 7人の息子たちとともに，アディティは原初の代（世）のもとへ去った。
子孫の為に（子孫を齎すべく），他方また，死の為に（死を齎すべく），彼女はマールターンダを連れ戻した。

第9歌解説

第9歌は，8cdを具体的に述べ，8cの「神々のもと」とは，「原初の世・世代」であると「解いて」いる。突き詰めてゆくと，原初の時代を神代の「黄金時代」とする，ある種の円環的史観が背景に想定される。円環的完結が継続する永遠を意味するという（もう一つの）観念については第4歌についての項参照（省略）。

「マールターンダ」はムリタ・アーンダ「死んだ卵」からの派生形で，「死んだ卵（即ち：流産された未成形の肉の塊）から生まれた者」を意味する。この語はサーヤナ（14世紀の注釈者）以来一般に「鳥」と解されてきたが，人間の始祖のことであり，失敗したお産から人間が誕生したというこの神話も，アーディティヤ神たち同様，インドイラン共通時代に遡ること（新アヴェスタ語「ガヤ・マルタン」，パフラヴィー「ガヨーマルト」。原義「死すべき／人の，命」），そして，その神話の詳細がヤジュルヴェーダの散文に語られていることを，K. HOFFMANN Münchener Studien zur Sprachwissenschaft 11 (1957) 85–103 = Aufs. II (1976) 422–438が示した。マイトラーヤニー サンヒター［MS］I 6, 12，カタ・サンヒター［KS］XI 6，タイッティリーヤ・サンヒター［TS］VI 5, 6，シャタパタ・ブラーフマナ［ŚB］（マーディヤンディナ III 1,3およびカーヌヴァ IV 1, 3），そして井狩発見の新資料ヴァードゥーラ・シュラウタスートラ・アヌアーキャーヤナ I 4（I 3, 1）に見られる各ヴァージョンの詳細な検討は別に発表を予定しているので，ここでは，散文資料から知られる神話の主たるモティーフを紹介し，創造神話の意味するところを指摘するに留める。

アディティが8番目に身ごもった胎児は，二人分（二神分）の体を持ち，優れた存在であった。先に生まれた神々は，彼に支配権を奪われることを恐れ，流産させる様に謀る。母のアディティは流産した子（上下左右両方向に等しく人の身長の大きさをもった，成形されていないこね合わせたもの：ŚB）の存続を願い，

先に生まれていた神々に懇願する。神々は，彼が自分たちを凌ぐことがないようにという条件で（MS），または，彼らの役に立つという条件で（TS），彼らの一員とする（彼はヴィヴァスヴァントとなり，人間たちの祖先となる）。KS, ŚB では，彼の死んでいた部分を切り離し，生きている分を救う（死んでいた部分は象となる）話が語られている。

神々が恐れるほどの能力を持った，しかも，球体の存在，ということで想起されるのはプラトーンの『饗宴――恋愛について――』に於いて，アリストパネースの語る恋愛起源説中に登場する４手・４脚・２顔１頭（４耳）…の球体の人間である（189d–）。本来，人間はそのような姿（主として，男－女から成るアンドロギュノス）をしており，体力優れ驕慢であったが，彼らに手を焼いたオリンポスの神々が，自分たちの役に立つように，二分割して，今日の人の姿と成した。恋愛とは，元の姿への回帰の営みである。インドにもこのような神話が知られていた（または，考えられた）ことは，ブリハッド・アーラニャカ・ウパニシャッド I 4の冒頭によって裏付けられる。即ち，アートマンは，原初，男女が抱き合った大きさをもつ人間の姿をしており，自身を二分割して子孫を作った。リグヴェーダ X 72の創造神話では，生と死，という二つの部分に切り分けられ，アンドロギュノスの場合には男と女とに分割されるが，人間二人分の要素からなる，球形の有能な存在という起源は類似している。

この，ホフマンが解明した，ヴェーダ散文に語られ，インドイラン共通時代に遡ることが確実なマールターンダの神話を背景に据えることによって，創造讃歌の「子孫の為に，他方また，死の為に，彼女はマールターンダを運び戻した・連れ戻した」の意味が明らかになる。「マールターンダを連れ戻した」は人類の祖先が地上に生き返ったことを言う。彼は地上で子孫を残してゆくが，同時に死を免れない。マールターンダが救われた時に切り捨てられた部分は死んだ部分であり，これと合一することによって，彼，即ち人は，元の完全な球体に戻る。死は，人の本来の姿への回帰である。創造讃歌リグヴェーダ X 72は，このようなマールターンダの神話を前提として，子孫を作ることによって生を維持する人類と，その個体の死の起源とを語って，世界，神々，そして人類の創造とその円環とを見事に締め括っている。